心をこめてありがとう

奨励	堂腰 きみ子〔どうこし・きみこ〕
奨励者紹介	同志社幼稚園長

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

（コロサイの信徒への手紙　三章一二―一四節）

心のこもった「ありがとう」という言葉

今日はこのようなお話をする機会を与えていただき、また、園児に歌を歌わせていただきまして感謝申しあげます。今日は「心をこめてありがとう」という題でお話をさせていただきます。私達は日々、「ありがとう」という言葉をよく使います。その言葉で一つのコミュニケーションがとれますし、その言葉によってホッとするような、心がなごむ一言でもあります。最近は、社会全体が「忙しい、忙しい」と心にゆとりがなくなってきました。そしてパソコン上で欲しい物が手に得られ、スイッチ一つで暖かくも涼しくもなり、お湯を注げばすぐに美味しい物も食べられる。また、即効性で結果をすぐに出したがる、そんな世のなかになってきました。そのような社会情勢のなかで、人と人とのコミュニケーションが、だんだんと希薄化したように思います。同志社幼稚園では、人と人の触れ合いを大切に、「ありがとう」・「ごめんなさい」・「おはようございます」・「こんにちは」など、親同士、子ども同士がお互いに言葉をかけ合うことができるような居場所でありたいと思っています。そのことによって、人を優しくさせたり、人を和ませたり、人の傷みがわかる者同士でありたいと願っています。子ども達が「ありがとう」を使うときは、プレゼントをもらったときや、何か助けてもらったとき、それから手伝ってもらったときなど、いろいろな場面で「ありがとう」という言葉を使っております。しかし、何気なく「ありがとう」と言うときと、それとは別に、しばしば、もっと奥の深い、心を込めた「ありがとう」という言葉を使うときとがあると思います。その、心のこもった「ありがとう」という言葉は、学習して言うものではありません。子ども達の感性に触れる学びが必要なのではないでしょうか。それぞれの体験のなかで、感性に触れ、心に響いたとき、本当に「ありがとう」という言葉が自然に出てくるのだと思います。

私は以前、本当に心から「ありがとう」と言ってもらった体験をしました。ある日、私の友だちが交通事故に遭いました。それは、突然襲ってきた悪夢でした。交通事故に遭ったというより、加害者として怪我を負わせてしまったのです。車がぶつかったとき、頭が真っ白になったことだろうと思います。被害に遭われたご家族は、命は無事でしたけれども、それぞれに傷を負われました。そのような場合、人間としてお互いが許し合い、認め合い、ゆずり合うということは、なかなか難しいことです。彼女は、精神的にも肉体的にもどん底に陥りました。相手が「許さない。あなたのしたことを、これからもずっと責め続ける」と言う。私はそれを聞いたとき、彼女と同じように血の気が引き、どうすれば、彼女に手を差し伸べ、力となることができるだろうかと考えました。人と人とのかかわりのなかで、お互いが許しあうということはしばしばありますが、反対に許しあえないということもたくさんあります。そのときに、何が大切かというと、誠意をもって相手に謝罪することではないでしょうか。誠意をもって、愛をもって相手のために何かを行うということが必要であると思います。

けれど、それを何日も毎日続けても、許されない。そのときに、人間の心はとても弱いところにいってしまいます。彼女の場合は、人に勧められてある象徴的な物を購入し、それを家に飾ったり、それを毎日拝むというような、ものに頼ることに走ってしまったのです。人に助けを求めても、アドバイスをもらっても、なかなか解決策は見つかりませんでした。私も、何かできることはないかと、毎日、毎日、考えていました。会うたびに彼女はやつれ、食事も喉を通らず、どんどんと痩せていきました。心もからだも弱っていき、そこに悪魔の手が入ってきたからです。弱みにつけこまれ、何でもないものを高値で買わされることもありました。しかし、ものを崇拝することで何も解決はしません。私は、それだけは止めてほしいと思いながら、彼女と同じ境地のなかで悩み、苦しんでいました。ずっとずっと何ヵ月も、彼女は仕事をしながら必死に、毎日、欠かさず、病院にお見舞いに行き、被害に遭われたご家族と向き合い、許してもらうことを哀願するだけでした。

やがて何が起こったでしょうか。彼女の誠意と、彼女の愛とが、そのご家族に通じたのです。苦しんで苦しんだ日々からやっと解放され、相手に許してもらうことができたその日、私に電話がかかってきました。私は涙が溢れました。自分のことのように感激しました。人間は誠意をもって、そして心をもって、相手に向きあえば、必ず新しい道が開けるということを知りました。そして彼女と会ったとき、「ありがとう」という言葉を、涙が溢れる胸のうちに受け止めました。このときの「ありがとう」は、本当に私にはかけがえのない「ありがとう」でした。それは、共に悩み共に苦しんだからです。人間には、楽しいこともいっぱいありますけれど、苦しいこと、悲しいこともたくさんあります。そして、それを一人で乗り切るのではなく、人に助けてもらって支え合うことで、この世のなかは成り立っているのだと思います。互いに愛し合う、互いに許し合う、それはとても大切なことです。それを実現していくことが、私たちの社会において、人と人との輪が広がり、平和な社会となる第一歩であろうと思っています。ほんの一つの出来事ですけれども、私にとってはとても大きな、本当に温かいものを得ることができた体験でした。苦しいこと、悲しいことを乗り越えてこそ、新しい道が開ける、その新しい道を糧として、また新しいスタートを進んでいくことが、私たち一人ひとりにとって必要なことだと思っております。

子ども達の「ありがとう」

子ども達は、「ありがとう」という言葉をどういうときに使うか自分たちなりに理解しています。園庭で遊んだあと、子ども達は約束を守って、一生懸命お片付けをしてくれます。自分たちが遊んでいないものや出していないものでも、「みんなでお手伝いし合って、お片付けしましょう」という幼稚園のルールをきちんと守って片付けてくれています。ある日、みんなで一生懸命お片付けをしているときに、四、五人の子ども達だけでは片付けきれないと察知して、他の友だちが手伝いにやってきました。見かねて手伝ったのです。お陰で、アッという間に終わりました。「早く片付けられたね、よかったね」と言ったその瞬間、Ａちゃんがこういう発言をしました。「『ありがとう』を言ってくれなあかんな」と。誰かに手伝ってもらったときには、「ありがとう」と言うのだ、という社会の常識を自ずと身につけているのです。

その場面で、今度はＢちゃんが「ありがとう、言わんでも、幼稚園の約束はみんなで片付けることなんや。ありがとうなんか、別に言わんで、ええんやで」と言いました。すると、Ａちゃんは「あ、違う、違う、何かしてもらったときは、ありがとうと言うんやで」と返しました。その場で関わっている私達大人は、Ａちゃんが言っていることも正しい、Ｂちゃんが言っていることも正しい、どちらが良い悪いの答えは出しません。自らの思いや考えで「ありがとう」と言える子ども、そしてもっと深いところでの「ありがとう」という言葉が言える子どもとして大きくなっていってくれたらいいなと思っております。集団のなかで成長していく過程で、子どもはいろいろな人たちに助けてもらい、支えてもらって、その安心の居場所のなかで自立し、豊かな心をもって大きくなっていきます。子どもの世界は、厳しいなかにも優しさで包まれています。子どもの優しさが大人にも、もっともっと反映していけば、よりすばらしい社会になると思います。

私は今、『人づくり二一世紀委員会』の委員をしています。地域の子ども達を見守り支え合いましょう。子ども達が健やかに生活できるように、私たち地域の大人達が何ができるかを考え、できる事を実行していくという会です。その委員会で、ある小学校に行ったときのこと、運動会の一コマで、驚いたといいましょうか、少しがっかりしたことがあります。現在、この競争社会のなかで、「できる子」・「できない子」をつくるのではなく、皆が同じようにできる力を伸ばしていこうという教育がなされています。「できる」・「できない」ではなく、一人ひとりは違いますから、その力をそれぞれが発揮できる場面をつくることも必要なことだと思います。先日のその運動会では、あらかじめ一人ひとりタイムを計っておき、同程度のタイムの子ども達を横に並べて競争させるのです。「大きな差が開かないようにです。」と先生がおっしゃいました。運動会のリレーは、私たちの時代では一番の見所でもありました。速い子がヒーローになり、遅い子は「がんばれ、がんばれ」と声援をもらい、他の子ども達に助けられながら、一生懸命自分の全力を出しきるというものでした。「遅くてもいいんだ、皆のために力一杯がんばった」、という気持ちがあってこそ、リレーが成り立っていたのです。チームワークの大切さ、人とのつながりによって絆も深まりました。しかし、私が見学したリレーは違いました。走りのとっても速い子が、「運動会だけは僕は光れるんだ」と実感できる場面がなくなってきています。思いっきり輝けないのです。一〇〇メートル競争も、ある学校では「ヨーイドン」とスタートして走り、ゴールの一〇メートル手前まできたところで、速い子が、一番遅い子が来るまで待っていて、そして皆で手をつないでゴールするというのです。それでは競争になっていない。人を思いやることとは、そのようなところからは生まれないと私は考えております。けれども、それについては賛否両論あります。私は、やはり速い子は速い子、遅い子は遅くても頑張れる力をもてばいいと思っております。走りだけが光れる場面ではありません。頑張ったら前に向かって行けるんだ、階段を一段ずつ頑張って昇っていけるんだ、という意欲をもたせるために、様々な状況で、子どもが光る場面、子どもが自信をもって皆より優位に立てる場面をたくさんつくってあげることが必要だと思います。それが自信につながり、将来自分の目的に向かい、何を目指して、何を好きになって成長していけるかという、根っこの部分を育てていくことが大切だと思っております。同志社幼稚園では、踊ることが好きな子、歌が好きな子、運動が好きな子、絵が好きな子などいろいろな子どもがいます。様々な場面において、一人ひとりの得意な分野で力を出し、友だちに認められ輝く瞬間があります。その結果で、勇気をもって一歩を踏み出すことができるのだと思っております。

バプテスト病院での出来事

毎年、同志社幼稚園の年長児はバプテスト病院に慰問に行きます。おじいちゃん・おばあちゃん達は毎年「十二月のクリスマスになったら、あのかわいい子ども達が来てくれるな。もうすぐやな」と楽しみにしておられるそうです。先日も、バプテスト病院の牧師先生からお電話を頂戴しまして「皆、楽しみにしています。子ども達、大丈夫でしょうか」との問い合わせがありまして、私は喜んでお引き受けいたしました。訪問時、子ども達は皆ドキドキしていました。クリスマスページェントを演じて、讃美歌を歌い、おじいちゃん・おばあちゃん達に手作りのプレゼントを渡して一緒に歌を歌います。ある一人のおばあちゃんが、始まる三十分前から、もう玄関のところに座っておられました。「私は同志社を出ました。懐かしい同志社の子ども達が来ることを、とても楽しみにしていました。同志社で一緒に学んだ友だちとは会えないけれど、同志社の子ども達が来ることで私の心は癒されています」と涙を流しておられました。きっと昔の、同志社での懐かしい時代を思い出して、涙しておられたのだろうと思います。車椅子で礼拝堂にこられる方や、点滴をつけてこられる方もあ

り、おじいちゃん・おばあちゃん達が元気な人ばかりでないことを目にしました。子ども達にとってのイメージは、いつもそばにいる元気なおじいちゃん・おばあちゃんです。けれどそこに来られる方々は、ほとんどが車椅子、足の不自由な方、介添えをして歩いて来られる方なのです。そんな姿を見て、いつもと違う、何かを感じているのだなということがわかりました。子ども達は、「ドキドキする、ドキドキする」と言って、とても緊張しておりました。そして、舞台に上がると、おじいちゃん・おばあちゃん達は子ども達の顔を見ただけで涙を流しておられました。その涙を見て、子ども達は何を感じ、何を思っているのか、私には、何となくわかります。そしてページェントを終えて歌を歌いました。「お母さんの歌」や「七つの子」など、昔、多分歌われたであろう懐かしい童謡をたくさん披露しました。一緒に大きな声で歌われていました。歌っている途中で、たくさんの涙を浮かべてハンカチを手に涙を拭いておられる姿を見て、「何か私も涙が出てくる」と言って泣いている子もいました。これまでにも、おじいちゃん・おばあちゃんと握手をするときに涙を流すことはあっても、歌を歌っている最中に、子ども達が涙を流したのは、初めてでした。涙をいっぱい流して、声を出して泣きだす子もいました。子ども達は、言葉には出せないけれど、心で感じとり、何かに気づき、涙が出たに違いありません。その子ども達の涙は、看護師さん、先生・学生さんなど会衆の皆さんにも、訴えるものがありました。私達は、子ども達が感動と勇気を与えてくれていることを痛感しました。そして握手をしてもらい帰り際、「また来てね、また来てね、頑張って生きるからね、来年も生きるからね」という言葉を聞いたとき、「ここに来てよかったな」と心からそう思いました。一人ひとり「うん、うん」と頷いている子ども達の姿を見て、人との触れ合い、そしてやさしい愛をたくさん受けたこのひとときに感謝すると同時に、人と人との関わりのなかで生きる喜びが与えられることを感じました。

　おじいちゃん・おばあちゃん達が、「ありがとう、ありがとう」と何度も、何度も頭を下げておられることに対して、子ども達はその「ありがとう」を受けて、「ありがとう」という深さの意味を子どもなりに受けとめ体験したことだと思います。

感性を育てるには

　私達は今、美しいものに出会ったとき、美しいと感じる感性を忘れかけているのかもしれません。「秋を感じるのは、どんなときですか」と保護者の方に聞くと、「秋って聞かれると、秋を感じることがないほど、日々忙しくしています」と言われる方があります。しかし、子ども達は秋をいっぱい感じています。葉っぱが色づいてきたとき、ドングリが落ちたとき、きれいな花が咲いたとき、「美しいな、きれいだな」と感じる感性は、知識で学ぶことはできません。たくさんの出会い、いろいろな体験、いろいろなものを見たり、聞いたりするなかで、自然に培っていきます。あるお母さんがおっしゃいました。「うちの子どもは何を見ても感動しません。何を聞いてもあまり反応がありません。先生、感動することを、どうやって教えたらいいでしょうか」と。とても難しい質問です。感性は教えて学ぶものではありません。いろいろなことを見たり、聞いたりして、様々な体験を積み重ねることによって自然と備っていくものだと思います。もちろん他にも様々な要因があるでしょうが。先日、日常の会話のなかで、「昨日、バスに乗ったら、お兄さん・お姉さんが携帯電話をしてうるさかった」と子どもが言いました。「そのとき、お母さん、どう言わはったの」「『あんなお兄ちゃん、お姉ちゃん、あかんな』と言ってはった」。もう一人の子どもは、お母さんに、「いつも僕に怒っているみたいに怒って」と言ったそうです。そして、「『いや、人の子は怒れないのよ』と、お母さんが言ったんや。先生やったらどうするの」という質問を投げかけてきました。きっとその子はその光景を見て、それはいけないとなんとなく肌で感じたのだと思います。「うん、先生やったら『バスのなかでは、静かに』と言うかもしれないね」と答えると、「やっぱりそうやな。お母さんに、そう言うとく」と言っていました。そのようななにげない会話、そんな会話が大切で、子どもの成長を育む大きな糧になっていきます。人間の力を越えたものを実感している人、その気持ちをわかる人と出会わない限りは、子どもに感性は育たないと私は思っております。そのためにも、私たち大人は感性をもって生きていきたいと思っております。人が困っていたら手を差し伸べることができるような人間であり、人の傷みがわかる人間でありたいと思います。自分にできることがあれば、どんなことであれ、まず子どもに返し、人に返し、そして他者に返していく気持ちがあるだけで、子どもはその背中を見て育っていきます。

　今日は最初に、「お母さん、大好き」という歌を歌いました。私は、この讃美歌が大好きです。いくつになっても、天国にいっても、母親はかけがえのない存在であります。もちろん父親もそうですが。子育て真っ最中のお母さんは、本当に大変だと思います。「お母さん、大好き。お母さんは神様がくださった。お父さんもくださった。おじいちゃん・おばあちゃんもくださった」。「じゃ、もっともっと、くださるものでほしいものは何がある」と子ども達に聞きます。いろいろな答えがありますが、やはり一番多いのは友だちです。大人の社会においても、友だちはかけがえのないものです。私は、子ども達はワイルドでいいと思っています。ワイルドな子ども、悪気がなくて、少しヤンチャで、でも素直で優しくて、いつも元気な子ども達。そんな子ども達が失敗したとき、悩んだとき、苦しんだとき、誰か相談に乗ってくれる人、誰か話を聴いてくれる人がいること、彼らが本当に辛いときに、行ける「居場所」があること、お互いにその関係づくりをすることが大切だと思っております。

　「お母さん、お父さん大好き。神様、お母さん・お父さん・おじいちゃん・おばあちゃんを、私達にくれてありがとう」。そして私には、子ども達の元気な笑顔と元気な歌声があり、「先生、昨日どうしたん、なんで休んだの」と聞いてくれる、私を待ってくれている子ども達に心から「ありがとう」です。ご清聴ありがとうございました。

二〇〇九年十一月四日　同志社スピリット・ウィーク　水曜チャペル・アワー「奨励」記録